



Title	＜翻訳＞ エクスプリカション：フランス式解釈法
Author(s)	リュドレール, ギュスターヴ; 片山, 忠雄
Citation	大阪外大英米研究. 1974, 8, p. 113-129
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99002
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エクスプリカシオン

ーフランス式解釈法ー

ギュスターヴ・ルユドレール著
片 山 忠 雄 訳

第一部

原 理 編

学校でのあらゆる演習のうちで、仏文のエクスプリカシオン¹ は恐らく一番厄介なものであろう。頭はよく、思うこと、感じることを正直に言おうとする気持はあるものの口重い青年が、テキストを前にして頭をかかえ、さんざん脳味噌を絞ってもとっさに名案の閃く筈もなく、くたびれ儲に終り、ひとことも出ずじまいという状況を御覧になったに違いない。というのも初心者にはフランス語の一頁を通読しても手掛りらしいものが一向に見付からないからなのだ。モンテーニュ (Montaigne)² の言っているように握ろうにも柄がないのだ。この場合は、注意を引寄せ、引付け、引込み、テキストと精神の仲立となり、必要とあれば作者の意図に仮面をかぶせ、思考、感情、印象の代役をつとめる逐語訳は全く姿をみせない。明白なしかも国語のテキストながら、悲しいかな不毛あるのみだ。ギリシヤ語とラテン語の場合、話は別である。ギリシヤ・ローマの作家はわれわれの先祖とはいえ、現在のわれわれにとってはやはり他人で、われわれと正反対だといってよいくらいだと思えるのだ。彼等はわれわれの慣習をかき乱し、驚を呼び起し、われわれの心に多様性の感じ——それが批評の場合と同じくエクスプリカシオンの始であり終りであるが——を目覚すからなのだ。と

ころがフランスの作家の場合には本当に身内だという気がする。現に平凡な思想や、既知の単語に^お対しているか、それともそうだと思いこんでいるかである。思想も単語も一つ残らず真っすぐ精神にはいりこみ、そこで吸収されつくし、そこから何一つ出てゆかない。われわれは感情をいきいきと刺戟され、すぐさまそれを言い表わせるようになりテキストを反映することも、テキストを離れ、我身からテキストを引離し、綿密に調べあげ、テキストと自分とをまた他人とを区別するテキスト独自の特徴を見通すことも出来ない。所見を得ても素朴にすぎるとして退け、口を噤んでしまう。あるいは、物を言うとしてもパラフレーズに身を委ね、作家の思想を単純、平凡に蒸しかえす。その必要はない単語の意味を解説する。統語法は明瞭かつ正常、論評は全く無用というのにアナリーズ・ロジック³を行なう。時には無茶苦茶に節度もなくテキストを離れ、手のつけられぬほど駄弁を弄することすらある。これはすべてエクスプリカシオンの規則の心得の無い結果である。

この規則を適切に操作するには、正確な方針と精密な方法が肝要で、これが精神の発達に寄与せぬのではない。しかしこの操作自体もある程度の一般教養乃至修練、すなわち知的面においては言うまでもないが、多少の思考力、判断力の円熟、感情の洗練、鑑識眼の鋭敏さなどのほか特に体験面における修練が前提となる。何となれば最も優れた書物は人生の書であり、体験豊かに充実した人生を送ったことのない人は書物愛をもってしか良書を愛し得ぬからである。従って、この意味においてはエクスプリカシオンは人間のわざであり、せき立は一切無用である。その他、前提となる一般教養は多くの読書、すなわち一般歴史と文学史の知識、文法・言語・韻律学の知識である。エクスプリカシオンは精神の獲得したものすべてを有意義に利用し、こんどはそれが精神を進歩させる。この間接的・外面的準備の取扱いは本書の採外にある。それは知力を広め、判断力鋭え、趣味を磨き、時代観、芸術観、文体感覚を身につけ、知識を貯え、体験を重

ね、比較事項を積み重ね、魂の問題と人生の問題を感じとる能力を涵養することである。筆者の願うところはただひとつ、エクスプリカシオンの理論の説明、それに尽きる。

I

エクスプリカシオンはいかにあるべきか

まず、エクスプリカシオンとはどういうことなのか。そのもとになっているエクスプリケ (expliquer) という言葉、それはどういう意味なのか。

エクスプリケとはテキストを説明すること、すなわち、テキストの精神と字句を⁴、全体として、部分的にかつ細目にわたって余すところなく理解し判断することである。

テキストへの服従、これが、従って、エクスプリカシオンの原則となる。それは科学の原則が事実への服従であるのと軌を一にする。

このことから、次に挙げる若干の事項が結論として生じる。

エクスプリカシオンの関心の対象はテキストである。たしかに解説者の知性と感受性を通して見られ、この両者によって変容させられるとはいえ、対象はあくまでテキストである。断じて注解がテキストの批判者たる関係ではなく、テキストが注解を批判するのである。従って、自惚れの余りテキストより個性のほうを選んだり、テキストを犠牲にして自分を目立たせたり、長広舌をふるってテキストを逸脱するのは慎みたい。^{注1}

^{ユーザリ}閑談が時にはテキストのように憂色をおび、一本調子で物識り顔に主張されたり、また時には陽気、慧眼、快活で、さもエクスプリカシオンだと思込ませるほど内容豊かに、才気と生氣と陰影に富み、テキストと精緻に調和していようと、エクスプリカシオンたるものは閑談に墮してはな

注1 エクスプリカシオンの理論をさほど深く究究せずとも、主観と客観、印象主義と独断主義の二律背反の存在は明らかである。本書は実際的なもののみ目指しているが、実際問題においては二者は常に自然に両立する。私は常識によって認められる事実の埒外には出ぬようにした。⁵

らない。エクスプリカシオンはまた次第に共感にふりまわされ、感情をくどくどと吐き出し、やがて底をつく感受性の流露でもない。最後に、エクスプリカシオンはモラリストと哲学者の格言の取扱にあたっても、書物はさしおいて、思想の間を漫然と移動し、自己の学殖を顕示したり、並置させたり、誇示したりする歎びにひたる気ままな長談義にもならぬよう用心する。つねに否応なしにわれわれを自分の方へ呼び戻すテキストを存在させよう。テキストにわれわれの血気を抑え、脱線を予防し、これを抑制する役目をさせよう。テキストから一刻も目を離さず、すべてをテキストに戻し、テキストを締めあげ、テキストを絞り、テキストにおいて少なくとも興味あり、かつ特異なものは出し尽させ、テキストに注解をへりくだらせよう。エクスプリカシオンはテキストとの格闘のようなもの、すなわちテキストを抱きこみ、テキストに入り込み、能う限りテキストの意味を正確に伝達し、テキストの有りの儘の姿を反映する不斷の努力たるべきである。

それ故、いま要点にふれるのであるが、われわれは作者の思想、感情、観点を再生し、その中において思想などが発芽した育ての親としての耕土や、その周辺に思想などが成長し、花を咲かせた環境などをその頁の背後に再創造すべく自己の思想、感情、観点、情念、偏見、環境などを忘れさせる努力を惜しむまい。エクスプリカシオンは気質のテキストへの迅速かつ潑刺たるしかも断じて盲目でもなければ、牽強付会でもない反応たるべきであるが、なおかつ特に周到、慎重にして整然たる洞察であることが望ましい。エクスプリカシオンは印象ではじまってもよいが、それは根拠あり、広大、完全にして真実なる批判に終るという条件付である。要するに、エクスプリカシオンは能う限り、個人的印象の客観的研究への置換をその目的としているのである⁶。もちろん自己分離に徹するのが不可能であるのは言うまでもない。従って、テキストの判断に当って一応結論を出しても、それがやはりしばしば近代人的なものになってしまう危険はあろう。しか

し、それは批評意識を十分に強力かつ柔軟に活動させることによって、自分がその拔萃を研究している作者及び同時代人のひとり、または同時代人全体に完全に変身できないからである。とはいえ、エクスプリカシオンは判断する前に理解することに始まる以上この変身はやはり理想である。しかも、少くとも極めて高度にこの変身を完遂すべき十分な精進は可能である。

考証的研究によってわれわれは作品の起原、周囲の状況、作品の効果に関する知識は獲得し得よう。他方またいかなるテキストもその内部と外部の特質を表示するが、問題がこの特質の確認に止る限り、まず論争は生じない。こと解釈に立到るとき初めて意見の相違が表面化する。しかし、この相違も縮小可能である。作者の意図において一個の思想、一個の感情は一つの意味を持ち、二つの意味は持たぬ⁷。従って、二つの解釈中一つは不正確である。すなわち、一方は精密さ鋭敏さにおいて劣り、特に簡単に割り切り過ぎているきらいがある。このほうの解釈はテキストのあらゆる要素への考慮が不十分である。それは同一視点下にすべてを確実に結合せず、多くの要素を見過している。知力あるいは感受性に直接伝る思想、感情はまたある文章の句切り、ある節の仕組み、顕著にして明々白々たる響鳴音、頭韻または半諧音、その意味は明確、その用法も一般に認容ずみのある単語によって表現される。内容と形式は逆校正刷のようなものというべく、全体と部分、テキストと前後関係が照応して明瞭になるよう互いに吟味しあうものである。およそテキストの一定の要素中、内容と形式の調和、相互関係はテキストの解釈において本来の意味から思付きを多分に排除しうる程度に大なるものである。

この意味において、エクスプリカシオンに関与するあらゆる能力、テキストを洞察し、注解に感動と魅力を付与し、想像力と協力しつつ解説をテキストのもつ数々の色彩をもって繊細にいろどる感受性、すなわち直覚力の鋭敏さ、共感の柔軟さと熱度、趣味、すなわち善悪、美醜を鋭敏迅速

に感得する天賦の才、道德意識、すなわち道義心の熱烈さ、真善への愛、想像力、すなわち事物の形状、色彩等々を脳裡に描く才能などのうち最も重要なものは理解力、すなわち知力である。何となれば知力はすべての能力中最も没个性的、最も慎重であり、著者の意図を個人の見解、夢想、幻影などをもって代替する危険性の最小なものだからである。他の能力はより顕著な特徴、さらに多くの魅力をそなえ、エキスプリカシオンの魅力を増大する。知力もまた崇拜の対象を持つ。しかし、知力は他の能力よりも自ら感動し、あるいは熱愛する場合においてすら、より厳格にして冷静、またつねに批判的なため、誠実にこれを用いるならば、知力はエキスプリカシオンにとって最も頼もしい道具となる。哲学書においては、知力は時には流動しつつ物体を取囲む流水に、また時には物の輪郭、色彩などを忠実に映しだす澄明な静水にも喩えられている。知力を含む共同作業にあたって、知力が他の諸能力をそのいずれたをとを問わず追放するようなことがあってはならぬ。そうではなく、知力に諸能力を統制、管理させるのが適当である。

ここまでくれば、エキスプリカシオンに肝要な性質は容易に察知できる。それは正確さである。事実、正確さとはそれ自体一性質というよりむしろ他のすべての性質に共通する一形式である。正確さとは上記の種々の能力に向けられ、それぞれのテキストに応じてその諸能力を局限し、厳格に従属させる明敏さの精神、あるいは的確さの精神である。一般論にしる、細部説明にしる、酷似する二個の作品、たとえば二篇の酒歌に無差別に役立つような注解はすべて不適當である。二つの思想は、外見上の酷似にもかかわらず、その発生、方向、発展の法則、その周辺との関係などにおいて常に異なる。およそ自然界の顔はそれぞれ異なるように、文学の場合も同一のテキストが二つ存在するためにはない。世間には瓜二つという人もいるものである。しかし、少し気をつけ、少し鋭く分析するならば両者間の著しい差異が判明し、瓜二つの人の場合も、結局、異なる面しか見えぬ

ものである。テキストの場合もこれと変りない。各テキスト間のあまたの微妙な差異がエキスプリカシオンを極度に多様化させるのである。正確さとはテキストに独自の特徴を付与し、それと他のすべてのテキストを区別するものを最も的確に把握し尽すことである。作者の意図と意図が表現され、展開している無数に近い理念、追憶、連想、心象、リズム、音声、色彩に関して特異な法則が理解されるとき正確になる。

要するに、エキスプリカシオンにおいては直感に基づく美的判断力がつねに余りに甚大であり、かつ動かし難い役割を演ずるのでエキスプリカシオンは科学的作業とはなり得ないにしろ、少くとも科学的精神において作者の意図を理解しようとすることは可能である。そして、これこそ私の努力したことである。私心を交えず、先入観に囚われず、臨機応変にテキストに服従し、心をひらき、テキストのなすがままになること、テキストを解明し、注解をテキストに厳格に従属させること、最も誠実にして錯覚におちいる危険性の最小な自己の部分によってテキストの確実な客観的特質とその根本思想のままに、またその年代とその環境においてテキストを研究し、慎重にテキストを解釈し、テキストに爾後の世紀の見解を強制する場合でも十分承知の上そうすること、テキストに即し、テキストから何ひとつ奪わず、何ひとつ付加えず、正確にテキストの本質、意味、広がり、展開を把握すること、私自身このようにエキスプリカシオンを理解し実践してゆきたいのである。

II

エキスプリカシオンの準備法

これから私の理解するままに、エキスプリカシオンの理論の細部にはいつてゆこう。正確、簡潔、基本的、実際的であるよう努めたい。

エキスプリカシオンを行うにはどのように取掛ればよいのか。また、エキスプリカシオンの目標は何であるか。

問題はなおエクスプリカシオンの準備段階を出す、その構成ではない。

まず注意すべきは、テキスト、テキストのみに立ち向い、これを洞察力をこめ、思念をこらして読むことである。この間、精神は力一杯テキストの奥深く立ち入り、これを吟味する一方、注意深く監視して、精神自身の内部にテキストの印象の生まれ出るのを見聞きし、感動に胸ときめかせつつ、その印象に心を開き、これを捕捉し、固定するのである。

この最初の読みは現代の原典批評研究版——それも最上なものの、または最上なものの一つ——によって行うがよい。他の版を参照するのはすべて後まわしにする。これら最良の諸版によればつねにそうとは限らぬが、著者の存命中に出版された諸版は通例参照の必要はない。さらに、フランス作家のテキストは大概設定し易く、そのテキストには抜萃の意味と趣旨を改変する程重大な差異は存在しない。文献学的研究はテキストの細部の研究において、おのずから然るべき位置を占める。それぞれの異本の読みを調査し、選択するのはその時点になってからである。

全 体

熟考と、必要ならばもちろんさらに数回の読みを伴うこの最初の読みは、直ちに重要な結果を生む。

この初読によって、次のものを見分け得よう。

1. テキストにその展開の見られる作品の主想、主情、全般的意味。

これを理解し、味得するのみならず、正確に確認、考察すべきである。

エクスプリカシオンのこの部分に特に読者の注意を促したい。肝要だからである。もしこれを欠如すれば、価値ある細部の注釈は存在せぬことになる。そのときエクスプリカシオンは原則においてそこなわれる。さて、作家の意図、しかも真の意図のみを汲取るのは意外に困難である。経験者ですらこの点において誤りをおかす。同一思想の示し得る殆ど瓜二つとも

いうべき諸相全部の中で、各テキストにおいて現実化しているのはただ一面のみである。この思想をその簡潔さのままに、あるいはそれを構成する複雑な諸要素を踏まえ、その正確な意味とニュアンスをも逃さず広くあてはまる形として、無理なく、要するに、拡大もせず、拡張もせず、限定もせず、そのものずばりの特徴を捕捉すべきである。この際、しばしば多分の柔軟性と時には鋭敏な批判精神、真の慧眼が必要となる。

2. テキスト中に展開している思想は無気力な死物ではない。着想された時点から、思想はいわば独自の生命をもち、実体をそなえ、展開の生みの親たる作者に対してすら強制力を持つ。作者は全く気随気儘に思想を誘導することも、またこれを表現することもない。思想はそれ自体内部に展開力乃至推進力を持ち、これが思想の歩みを速めたり、遅くしたり、止めたり、あるいは再出発させる。特に思想はある組成の形式、原則を内包し、それによって自然に散文の無数の自由なリズムに従いつつ、根底においては類似しながら、時には等しく、時には異なり、時にはより長いとか、より短いとか、よりひき締まっているとか、よりゆるんでいるなどとさまざまな形をとる数多くの演説や抒情詩や叙事詩などのフレーズ（私はこのフレーズなる単語を音楽用語『小楽節』として用いているが）に分かれる。

形式とは思想の展開したものに過ぎない。思想と形式は優れた作家の場合、同一不二である。

従って、思想の本質を見分ければ、同時に思想を表現している展開の本質と様式も認知されよう。作品の構成も見抜かれ、その各部分——その部分とは思想の自然な展開過程であり、宿場のようなものであるが——も区別されよう。文、または詩の場合には、節の一般的排列と全体の特色、またさまざまな節の後続する場合は節の働きとその存在理由も検討されよう。

この場合、単に確認が行れるのみならず、まさしくエクспリカシオンが行れるのである。

作者は自己の思想に反抗するときもある。作者は自己内部の展開・組織

力に身を委ね得ない。このような場合、作者の思想は内部から展開せず、作者は外側から思想を展開させる。進展し、組織化されるのは思想ではなく、文あるいはイメージである。たとえば、ラ・ブルユイエール (La Bruyère) はしばしばこの明かに劣悪な創作態度におちいつている。この外面的、内面的の二次元が共存し、強化しあう場合、あるいは対立しあう場合すら起り得る。その際、かなり整理の困難な問題も生じる。しかし、それは少くとも興味をそそられる困難であり、途中でこれに出くわすのは楽しみである。

3. テキストの持つ顕著な美的乃至精神的な一個またはそれ以上の特色、その特色の示す魂または精神の様式と特質、その発生源たる本質的な情動、すなわち、憂鬱、陽気、憤怒、怨恨、平静、皮肉、機智、柔和、情念、論理など数えあげればまさに枚挙に暇なしであろう。この際もまた大まかにこの特色に注意するのみに甘んじない。正確に微細な差異を追求し、必要な場合には、その差異の配分を明確にする。

この最初の読みは、精神がみずみずしさを失わぬうちに精神をテキストに取組ませる長所を持っている。あらゆる先入観のはいりこまぬ前にテキストをそれ自体において、そのみに基づいて判断し、テキストに関してつねに最的確とはゆかずとも最も卒直、鋭敏な印象をもたらし、最もよくテキストの意味と独特な展開の法則と配置と真の特性、一言でいえば、生气に溢れ、見事な一貫性を捕捉させるのはこの初読である。もしゆっくり研究するためにテキストに立戻り、最初に軽く描いた線を洗練したり、誇張したり、点検したり、なぞったり、他の要素の不利益をも顧慮せず一つの要素の重要性を強調したり、全体を犠牲にして細部を強調しようとするような場合には、第一印象に立返ろう。分析する前にテキストと初めて接した時の敏感さのみによって得られるあの完全な節度感、価値感、全体の理解、感触の的確さと鋭敏さ、感覚力の精粹と光明を取戻そう。

しかし、到達した結果を決定的だと考えてはならない。個人的な印象の

関与が過大なおそれもありうる。個人的な印象の重要点は恐らく残存するであろうが、結果を検討し、修正すべきである。このようなこと全部が入交って正確になってゆく。その次第は以下の通りである。

これまでは、テキストをあたかも孤立した全体のように、その発生と内面の展開とその本質的特徴などにおいて考察してきた。これは狭い見方であり、寓話や、十四行詩や、一般にいかなる書物にしる冒頭の二十行（この書物が第二巻でなければ）などに関しては適切であるが、洗練を欠く作家たちの場合にも適用できる。何となれば、その思想は絶えず連続性はもつものの先行する思想に殆ど根源を持たず、それを圍繞するものとの間に制帯も存在せぬからである。しかし、複雑にして洗練された作家は思想表現のはるか以前に、思想を用意し、終始その監視を怠らず、またはるか以前にそれを準備している。そのような作家の各頁はその個性、本来の価値と意味を保持すると同時に一つの結果でもある。それは一つの展開、あるいは一般的進行中のある特殊な動きを示す。それが投げる光は一部分反射光となる。従って、その頁を理解するには、その時代と全体の流れにおいて、それが置かれている場においてそれを見、作品全体におけるその位置づけを行なう必要がある。前に述べたように、その頁をまずそれだけ読むこと、さもなければ、注意は先行する頁の空漠たる集団のみに集中し、その集団しか記憶に残らぬことになる。しかし、次に作品の残余の部分にさかのぼり、遠方からその頁の現われるのを見、一定の時点に集結して複雑な織物を構成している糸を次々に一つ一つときほぐし、その頁の一番細い根源を次第に発見し追跡してゆく。再びその頁に立返るとき、側面も下側も、すなわち、遠くかなたの深みにあった価値も認知されるであろうから、その直接、明白な個性的価値はよりよく理解できよう。最初は、その頁がある点において發育不全で、限定され、局限され生彩を欠くかのような印象を受けていたかもしれない。しかし、やがて、準備のために調査した頁からその頁に読者の持ちこむあらゆる思想と感情によって同一頁がよ

り熱烈、鮮明にして生氣と変化に富み、内容も充実したものに感じられるようになってくる。読者は新しい血液がその頁に注入されたと断言するようになる。

しかし、作品から拔萃された一頁の論理的または感情的起原を捕捉するのみでは不十分である。その頁を外部からも研究すべきで、この種の重大な調査研究を究めたときはじめて、自分の行っている本質的研究においてその時点に至るまで流動的だった結論を最終的に決定し、エクスプリカシオンを一挙に定着し得るであろう。

従って作者の自覚、無自覚を問わず、テキストへの外部の影響をその特定たと、一般的たとを問わず、探求しよう。その研究は次のものについて行う。

1. その材源に関して。

作者は主想を先行者に負うていないか。あまたの回想、かすかな追憶が作者の記憶中に交叉し、その記憶の横糸を構成していないか。また、作者は作品において器用な整理者、練達のあるいは天才的な翻案者に過ぎぬ場合もある。彼は多くの作家から風俗、習慣等々の細目は言うに及ばず、文や章節全体を借用し、その事実を人は彼の功績であるかのように考えたい誘惑にかられるであろうし、さらに進んで感心しかねまじいこともあろう。

2. 現実との関連において。

このような書物に発する起源にとどまらず、芸術は決して自然の転写に過ぎぬものではなく、忠実さに多少の差はあるが自然を解釈する。

作者にその作品の素材を提供するのは時にその知的・感情的生活であり、またその情念、冒険、悲嘆、憎悪、遺恨などである。作者は純粋な芸術作品の下に、その作品の栄養源となった清純な小説や混濁した小説を置きなおしてみなければならない。そして一般的に、テキストとそのテキストを包んでいるあらゆる現実との比較をできる限り徹底的におし進めねばならない。

作者の着想のもととなるのはまた同時代、あるいは過去の世紀の生活である場合もある。すなわち、逸話、いろいろな事実、さまざまな事件、年代記や歴史などは剽窃、再生、変形、潤色、誇張などに役立つ。より広くみれば、その作品が正確に証言ともなっているとも言えるが、また逆に作品の着想と仕上げに直接あるいは間接に影響を及しているしかじかの事態、気質、思潮、哲学、流行、科学、国家・社会組織など、それらのものにその作品は対応しているのである。

3. テキストが同時代人に与えた印象と同時代人によるテキスト批判。

これはその発生と環境において考察してテキストを理解する上の貴重な資料となるいま一つの源泉である。^{注2}

注2 この点に関しては、是非とも解決を要する重要問題が生じる。

時代と環境が作者の個性に及ぼす一般的影響に関しては、時にはその作者への作用は血液の組織に及ぼす作用よりさらに知覚し難いが、それを把握するよりテキストに該当させるのが困難である。作品と作者と時代との調和を見出すのは、実際は批評家のなすべきことである。エクспリカシオンの関心の的となるのはある一頁のみである。従って、一般論にしろ、この頁に特に該当せぬことは何一つ言う必要はない。エクспリカシオンは特にそれに適合したものに限定して述べればそれで完全である。その点において成功すると自惚れ過ぎるのは禁物である。ともかく、自分の解説をテキストに最も正しく適合させ、自己満足は慎み、節度と正確さを失わず、堅苦しさは避け、直接役立つもののみにとどめよう。

特定の影響に関して言えば、それがテキストからはみだすのは稀であるが、それを発見するのは困難である。発見のための処方箋のようなものは皆無である。最も学識深く、最も注意深く、さらに最も幸運な研究者が最良の収穫を収めるであろう。

エクспリカシオンにおいて、思想や表現の類似したテキストの蒐集や比較への溺れ過ぎがみられる。私はこのような蒐集の興味や教育的価値を否定するものではない。教師は蒐集がテキストを回避し、仮面をかぶせ、これを埋没させることなくしてどの程度までこれを認むべきかを判断する。しかし、模倣の可能性が存在するとか、確実に存在する場合とか、明らかに影響の見られる場合を除いて、この蒐集は全面的に禁止する方が健全かつ正当であると私は信じている。あるテキストに関して同類の着想に基づくそれ以前のテキストを挙げると仮定しよう。しかし、他のものに優先してそのテキストを挙げる理由は何であるか。何故ほかのテキストを挙げつくさないのか。何故フランス語またはラテン語、あるいはギリシヤ語のものに限定するのか。一旦手を付ければ、もはや途中で止まる理由はない。従って、厳密にそのテキストの材源のみに限定し、しかもその材源のためではなく、テキストとの関連においてのみ研究しよう。あらゆる光りをそのテキストに集中すべきである。ほかのものは薄明りに残す。これはわれわれのたてた一般原理の必然的結果である。

何となれば、たとえ芸術はある意味において絶対的であり、一定の頁は常に固有の価値を保持するとはいえ、芸術を歴史的批評の諸規則に服従させ、その発生に立会い、真の要素と意味を識別し、この点において作者とその時代を考慮に入れるのはその理解自体のために最も重要だからである。感嘆は盲目でも止むを得ぬが、その罰を忍んだうえて歴史的たるべきで、ボスュエ (Bossuet) の一つの説教とかパスカル (Pascal) の一つのパンセなどはそれらの世紀との適合によってのみ価値も意味も持つものだと人は知るルナン (Renan) の逆説である⁸。われわれとしてはそれらの作品はその時代の外にあっては実際もはやその価値も意味も十分には持たず、またその真の価値も真の意味も持たぬことを少くとも銘記すべきである。

この極めて困難な問題を明らかにするために、参照可能なあらゆる版と一般参考書を利用すべきである。もし新しい材源を示したり、現在研究中、あるいは以前読書中に発見した自分の説明を持出し得れば幸運である。テキストに関係ある正確な資料全部、あるいは一般的見解をすべて簡単に書き留める習慣を付けるべきである。いざとなれば、その参照を思出すであろう。受験生は少くとも要点を思出すよう試験科目の指定テキストに関して一年以内にこの作業を完了すべきである。

要するに、うまく作家の頭の中にはいりこみ、さらに、外部の様子もよく見張り、作家の思想が一種の自然発生、すなわち、その原因不明なものによるにしろ、読者の認知し捕捉した外部の原因によるにしろ、誕生するのを見たと仮定しよう。その思想が本来の力によって向う最初の方角であれ、あるいは一定の時点において出所も出現の理由も様式も明白な付加要素によってあるいは強くあるいは弱くおしやられる新しい方向であれ、読者は思想が次第に明確となり、組織化され展開するのを見届けたことになる。多くの暗中模索と試行とを経て、思想が遂に最終の形式に到達するのも見られる。思想がそのために書かれた世の中を渡って行く外的生活の跡も辿れる。その後自分にかえって、自分のために、自分の観点から思想を

理解し、評価し、判断する。その場合、思想をその相対的価値において、全面的に、また可能ならば、その絶対的価値において理解する。読者は思想を顕著な建築様式、その基礎と土台、その現実の存在と由来を踏まえて捕捉する。このような条件をすべて満たし得れば、テキストのエクспリカシオンは完璧となるであろう。〔未完〕

訳 注

1. Explication de texte あるいは explication française にはさまざまな訳語が与えられている。竹内敏雄教授編集の「美学事典」は explication des textes に「本文解明」、伊吹武彦教授が雑誌 SENSE の2号で Rudler の Explication française を簡潔に紹介されたものでは「フランス文解釈」すなわち「国文解釈」という訳語をあてておられる。矢野峰人博士は『新・文学概論』において「批判的味解法」、また芳賀徹教授は「学燈」61巻、11号所載のエティアムブルの『比較文学の危機』の訳文において explication de texte に「原典腑分けの方法」という訳語を与えておられる。伊吹教授のものは原語に即したもので、矢野博士、芳賀教授のものは内容にかんがみて考案された訳語であろう。現在では定訳と称すべきものは見当たらないので、訳文ではこの道の先達の一人である島田謹二教授もそうしておられるように原語のままエクспリカシオンとしておいた。なお、この場合の texte は Robert の辞典には次のように説明してある。“page, fragment d’une oeuvre, caractéristique de la pensée ou de l’art de l’auteur” 「作者の思想あるいは技術の特色を示す作品の一頁、抜萃」訳文では「テキスト」としておいた。Pierre Pouget の L’Explication Française au Baccalauréat (Librairie Hachette, 1952) ではバカローレアの試験においては「テキスト」は散文、韻文とも15行から25行であるとしている。なお、訳文中「ひとことも出ずじまいという状況」とあるのは、エクспリカシオンは本来口頭で述べられるものだからである。
2. 関連個所の原文は次の通り。“C’est qu’une page de français n’offre aucune prise à la main novice ; elle n’a pas d’anse, comme dit Montaigne, par où la saisir.” (イタリアック訳者) モンテーニュの正確な出典は確認できなかった。ただし、ルードレールのパスカルやルナンの場合におけるややルーズな引用からみて、次の文を踏まえているかも知れない。“où il n’y a point de prise, rien qui vous esveille l’esprit” (イタリアック訳者) 「つかまえどころもなければ、精神をよびさますものは何ひとつありません」この出典は『随想録』Essai の第1巻26章「子供の教育について」De L’Institution Des Enfants である。

3. analyse logique は analyse grammatical に対比して用いられる文法用語である。前者は節、後者は単語について、その性質、機能を明らかにすることを目的とする。
4. 「精神と字句」という表現は「コリント人への第二の手紙」第三章、第六節に由来する。「内容と形式」といっても同じであろう。
5. ここに述べられている点については矢野峰人博士の『新・文学概論』第二章の終りに引用されているカザミアンの説を参照されたい。
6. この個所についてはルードレールの先師ランソン (Gustave Lanson) の次のことばを参照。「簡単にいえば、科学的方法の第一の掟は知るべき物の性質に従って知るべき手段を組織化することにあるとすれば、われわれの研究において印象主義を否定するよりそれを認容し、規制する方がより科学的であろう。ある実在を否定してもそれを除去できないように、この取除き難い個人的要素はわれわれの作業にしのびこみ、勝手に働くものである。印象主義は作品の力強さと美しさの感じを捉える唯一の方法であるから、印象主義をそこまでためらうことなく使用しよう。しかし、印象主義はきっぱりそこまで止りにしよう。印象主義を印象主義としてとらえ、これを他と区別し、これを評価し、これをコントロールし、これを逸脱せぬよう努めよう。これがその使用上の四条件である。要は知ること (savoir) と感じること (sentir) を混同せず、感じることを知ることの正統な一手段となるように有効に使用することである。」 “En deux mots, si le premier commandement de la méthode scientifique est la soumission de l'esprit à l'objet pour organiser les moyens de connaître d'après la nature de la chose à connaître, il sera plus *scientifique* de reconnaître et de régler le rôle de l'impressionnisme dans nos études que de la nier. Comme on ne supprime pas une réalité en la niant, cet élément personnel impossible à éliminer entrerait sournoisement et agirait sans règles dans nos travaux. Puisque l'impressionnisme est la seule méthode qui donne la sensation de l'énergie et de la beauté des oeuvres, employons-le à cela, résolument. Sachons, en le retenant, le distinguer, l'évaluer, le contrôler, le limiter : voilà les quatre conditions de son emploi. Tout se ramène à ne pas confondre *savoir* et *sentir*, et à prendre les précautions utiles pour que *sentir* devienne un moyen légitime de *savoir*. (La Méthode de L'Histoire Littéraire, Essais de Méthode de Critique et D'Histoire Littéraire, rassemblés et présentés par Henri Peyre, Hachette, 1965, p. 39)
7. この点においてもルードレールはランソンの説を祖述している。すなわち、ラン

ソンは学徒は訓練によって一作品に含まれているものの理解を程度の差こそあれより深め、そのひろがりを程度の差こそあれより完全に探索できると信じていた。その際の先決条件は「テキスト自体がわれわれの精神、われわれの感受性と独立してある一個の意味を読者にもつことである」“les textes ont un sens en eux-mêmes, indépendamment de nos esprits et de nos sensibilités, à nous qui lisons. (G. Lanson, Quelques mots sur l'explication de textes, pp. 40, 41) これは多年にわたってランソンのゆるぎない信念であった。ルードレー自身もこの線にそう見解を堅持していたのは当然である。しかし、ランソンは後年この絶対主義に重大な修正を行っている。それは上記の論文の脚注に述べられているようにブルースト (Proust) の作品に親炙してからのことである。すなわち、自我と非我はわれわれの知覚と認識に不可分の状態に存在するとの認識をもち、文学作品は必ずしも一個の意味をもたず、複数の意味を持ちうるという相対主義的な読の可能性を肯定するようになった。しかし、作者の意図はやはり特権ある意味であるとする考は捨てていない。今日、英米において一般に認められているのは W. K. Wimsatt, Jr. と M. C. Beardsley が intentional fallacy 「意図に関する誤謬」論において、述べている立場であろう。彼等は作者と作品との関連を認めながらも、作品は一旦作者の手を離れると、作者の意図や思想から独立して存在しなければならないとする立場をとっている。(J. T. Shipley (ed.), Dictionary of World Literature, Littlefield, Adams & Company, 1964, pp. 326-7)

8. ルナンの逆説は “L’Avenir de la Science” 『科学の将来』にみえる。